

肥満 Obesity

食生活が人間なみに豊かになってきた今、動物達も肥満に悩まされています。基本的に肥満は単純です。摂取するカロリーよりも消費するカロリーが少なければ肥満になるのは当たり前ですよね？

肥満とは厳密には体脂肪が通常よりも増加(数と大きさ)した状態をいいます。一般的に肥満は病気と考えられていないようですが、医学的には、心臓をはじめとした各種臓器に障害を与える原因となるため重要な病気として考えられます。

特に中年期(6~8歳)の犬には肥満が多いようですので注意が必要です。また、ゴールデン・レトリバー、バセット・ハウンド、ビーグル、ケアンテリア、キャバリア、コッカー・スパニエル、ラブラドル・レトリバー、シェパード・シープドックなどは肥満になりやすいとされています。

原因

飼育者が消費エネルギーを越えて過食させることが一番の原因です。また、運動不足も原因となります。もちろん病気(副腎皮質機能亢進症、甲状腺機能低下症など)により二次的に肥満がおこることもあります。

犬、猫の場合肥満の9割以上は過食が原因です。

症状

一般的な理想体重よりも15%以上体重が増加している状態を肥満といいます。過食。運動をきらうなども症状としてみられることがあります。

診断法

体重測定や視診で判断できます。もちろん病気による肥満の可能性があれば各種検査が必要になるでしょうし、一般的に肥満の程度や全身状態を正確に把握するために血液検査やレントゲン検査、超音波検査を行うこともあります。

治療法

摂取カロリーと消費カロリー、運動量を見極めて減量を行うことが必要です。餌は減量用の処方食を用います。また、長期的な視野に立って減量プログラムを作成して実行します。

1週間で体重の約1%を減量させるペースがリバウンドなどを抑え、理想とされています。週3%以上の減量は好ましくありません。

もちろん運動も必要ですが、猫では運動による肥満の改善は難しく、一般的に食事療法により減量プログラムを行います。

二次性高脂血症はその原因となる疾患を治療することが必要です。

自宅での看護法

まず必要なのは飼い主であるあなたと家族全員の協力です。肥満は病気であることを十分に理解してください。ペットは自分で減量できないことも知ってください。

現在肥満であれば減量用の処方食を与え、きちんとした減量プログラムをたてて実行しましょう。できれば毎日、食餌の量と体重を記録していくといいでしょう。また、おやつを控えることも必要です。

また、ほとんどの肥満の動物は飼主の食事中に人間の食べ物を与えられています。これが最大の肥満の原因です。肥満は病気であることを理解して、まず人間の食餌や食べ物を絶対に与えない心掛けが必要です。あなたが与えるその一口が肥満の原因です。

予防法

動物は同じ種類、同じ年齢などでも、個々に必要エネルギーや消費エネルギーが違います。まず、きちんとしたメーカーの良質なペットフードを適量与えること、おやつを控え、おやつを与えるのであればその分のカロリーを与える餌から引くこと、餌の1割以上のおやつを与えないこと、食卓にならぶヒトと同じ食物を与えないこと、十分な運動をすること、食餌は1日1回ではなく複数回に分けて与えることなどが予防になります。飼い主の生活様式と行動が肥満の最大の原因であることを認識してください。

また、肥満の予防は発育期の適正な運動と食餌が重要だとも言われます。なぜなら、脂肪細胞の大きさは生涯にわたり大きくなる可能性がありますが、その数は発育期のみしか増えません。このため発育期に肥満(脂肪細胞の数が多くなる)になると生涯肥満体質になるからです。

メモ

肥満は、十字靭帯断裂、股関節形成不全、うっ血性心不全、高血圧、呼吸器の障害、糖尿病、膝炎、肝臓病、膀胱炎などの病気のリスクを増大させることが知られています。特に理想体重の25%以上の肥満は各疾患に対するリスクが非常に高くなり危険です。

避妊手術や去勢手術により肥満が増えると言われますが、避妊手術や去勢手術をするとエネルギー摂取量は変わらないのに、消費量や運動量が低下するためと考えられています。ですから、手術前と同じような質、量を与えていると肥満になる可能性がありますので、手術後は状態を見ながら量を減らしたりする必要があります。手術をしたから肥満になるのではなく、変化したエネルギー消費や運動量を考慮しないで飼育者が過食させることに原因があります。

下痢をしている場合は、一通りこれらの原因の可能性について考えてみて下さい。もちろん動物の状態が悪いとか、下痢に血が混じる、嘔吐の回数が多い、嘔吐している期間が長い場合には急いで動物病院を受診しましょう。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..

当院のホームページ上のPDFファイルなら動画や音などがご覧頂けるものもあり、より病気について理解できます。他にも様々なコンテンツや情報を掲載しております。ぜひ下記URLにアクセスしてください